主の降誕（日中のミサ）

福音朗読　ヨハネ１・1-18

2024.12.25　11：00 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

皆さん、主のご降誕、クリスマス、おめでとうございます。（おめでとうございます。）

毎年わたしたちはこのようにクリスマスのごミサをともにお捧げしています。毎年お捧げするご降誕のごミサを通して、わたしたちが、またこの人間の社会がどれほど神様を忘れ、また拒絶しようとも、一人ひとりの心の中に、またわたしたちの間に何度でも希望となって生まれ直してくださる神様の憐れみに改めて信頼する、その思いを新たにしたいと思います。

ところで、来年、と言いましょうか、正確には今年のバチカンでのクリスマスの夜半のミサの前にバチカンの「聖年の扉」が開かれ、昨日から再来年（2026年）の１月６日まで、25 年ごとにカトリック教会が祝う聖年、聖なる年が始まりました。聖年というのは、外国語では Jubilee（ジュビリー）という言葉ですが、日本語では聖なる年と書いて聖年（せいねん）と呼ばれます。

その聖年の間には、それぞれゆるしの秘跡を受け、そして指定された教会の「聖年の扉」という――ひとつのしるしですけども――そこに巡礼してその扉をくぐり、その後（あと）また愛の業に励むということを通して特別な恵みをいただくというふうな、ひとつの象徴的な行事、と言ったらいいでしょうか。その特別な恵みというのは、簡単に言えば――伝統的な言い方をすれば――死後直通で天国に行くことができる、そしてその聖年の恵みは他の人にも譲ることができるので、先立って亡くなった方々のためにも、生きているわたしたちは自分自身がゆるしの秘跡を受け、そして巡礼し、愛の業に励むということを通して、亡なった方々が直通で天国に行けるという恵みを願うということができるというふうに言われているわけです。

今年の「通常聖年」では、教皇様が『希望は欺(あざむ)かない』っていう大勅書(だいちょくしょ)と言われる文書を出されております――たぶんこれは「天使の森」（教会の売店）で売ってるんじゃないかな。この中で、死んだ後(あと)のことだけじゃなくて、この聖年は今の社会、この世界においてほんとに希望が失われるような現実に直面しながら、しかしそれを通して、暗闇を光に変えてくださる――今日の福音の中でも光は闇の中でも輝いているというところが読まれましたけども――闇がいかに強く見えても、それを貫いて神様の希望があるのだということを改めて思い、そしてそのために具体的にわたしたちが、あるいは人類共同体が行動することができるように、その促しのきっかけとなるように願っているということをおっしゃっているわけです。悪と暴力には敵わないっていうふうに思ってしまう、そのことが誘惑なんだと。その誘惑に打ち勝つ恵みをこの聖年を通していただくということを呼び掛けていらっしゃいます。

具体的には、教皇様は八つの、特に希望を願わなければならない、そういう社会の状況をあげていらっしゃいます。一つは、もちろん、絶えず世界各地で戦争が終わらない、そしてそれを解決する知恵が見出せないように思う、戦争ばっかりしているこの世界の中で平和への希望を新たにする、そしてそのために何かをするということです。

そしてもう一つが、命を新たに生み出すということの希望を失ってしまっているような生活のモデルや人生の生き方の中で、次の世代を生み出すということに希望をもう一回、特に少子化というようなことが起こっている社会において、命への希望を新たにし、また既に与えられている命を社会のみんなで支えながら育てるようにっていうことが作り出されていくようにというのが二つ目。

そしてもう一つが受刑者のため。いろんな形で罪を犯し、そして牢屋に入っている人が自分自身を取り戻し、また社会に復帰するために、具体的に有効な――ただ刑期を終えたから出ましたっていうことではなくて――自分を取り戻し、また社会の中に復帰してともに生きていけるような具体的な手立てが講じられるようにっていう受刑者の希望が与えられるように。

そしてもう一つが、いろんな形で病気の方々にケアが行き届くように。

そしてもう一つが若者。若者が希望をもって将来、自分自身の人生を生きていくことができるように。

そして移住者。いろんな所で自分の故郷から離れざるを得ない人たちが、それぞれの所で社会の一員として受け入れられるように。

そしてもう一つが高齢の人々。高齢者が孤独の中に取り残されるのではなくて、むしろ信仰と人生の知恵の大切な宝として受け取られ、そしてまた世代間を通して未来への希望となっていくように、高齢の方々のため。

そして最後が貧困問題。世界では、国際会議で貧困問題が取り上げられるけど、それは付け足しとして触れなければいけないから触れているように感じられますと教皇様はおっしゃいました。でもそうじゃなくて、ほんとにそれに取り組むように、世界が協力するように。この八つの面を具体的には訴えておられます。

それぞれ教皇様があげておられる問題、でもそこに希望がもたらされるようにと願っておられる八つの側面。この「八つ」っていうのは、復活を表わしている数字なんだというふうに教皇様がおっしゃいます。それぞれ、闇に思えるところに、でも希望を持って人々が協力するところに、人類の新たな希望になっていく、そういう切り口でもあるのだ、と。ただの「問題」ということだけではなくて、そこにほんとに取り組むならば、それが恵みの入口になるんだということをおっしゃるわけです。聖年を通してわたしたちは神様の恵みに信頼して希望をもって、そしてそれを具体的に実現していく業(わざ)に参加していくことができますように祈りたいと思います。

そしてまた、みんながローマに巡礼に行けるわけではないので、ローマの聖年の扉は昨日の――というか時差があるから今朝なのかな――クリスマスイブのバチカンのごミサの前に教皇様が――教皇様は車椅子だからご自分ではドアを開けられないけど――主催した儀式の中で聖年の扉が開かれて、教皇様が最初にそれを通って、そして後(あと)にみんなが続くっていうのがありました。これで聖年が始まったわけですけども、みんながローマに巡礼に行けるわけではないので、それぞれの地元の教会でも巡礼指定教会が定められていて、聖年の扉をくぐるということはひとつの象徴的なことですけど、聖年を特別なしるしのうちに希望を新たにする、そしてキリスト者としての使命を生きる思いを新たにする、そのことが呼びかけられていて、それは東京でも巡礼の指定教会が定められているし、東京教区での聖年は今度の日曜日、12 月 29 日の 15 時からのカテドラルでの式によって開幕するわけです。そのパンフレット「聖年　希望の巡礼者」は聖堂に（これは無料で）置いてあります。お手に取って、ご活用になって、この

聖年を特別な――個人的な観光とか信心だけではなくて――それぞれにとって八つ全部に同じようにかかわるわけにはいかないかもしれませんけれども、それぞれの関わり方の中で、教皇様の呼びかけに応えて教会として社会の中に希望を保ち続ける人々の群れに加わりたいと思います。

わたしたちの罪や社会の暗闇よりも勝って導いてくださる神様の恵みに信頼しながら、このごミサを通して互いのために恵みを祈り合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/